

■（９４）仕事とプライベートの境界線

歌舞伎役者が公演中、約３メートル下の「奈落」に転落した。偶然にも収録中だったテレビ局の映像には、「救急車！」の大声。ただ、頭などの打撲だけで、命に別条はなかったという。家族によると、観客だった医師２人が即座に役者の元に駆けつけてくれたらしい。

医者とは、私的な時間でも目の前に患者がいれば治療する。どんな職業でもそうだろう。記者も、休みで出かけた先で事件や事故を目撃したら、そのまま取材を始める。記者になりたてだった二十数年前、先輩からは「私らは２４時間仕事」と指導された。パトカーや消防車のサイレンを聞き漏らさないように、私的なドライブの際も運転席側の窓を開け、カーステレオの大音量は避けるようにも言われた。やや極端な内容だったが、「仕事への心構え」を学ぶのには役立った。私的に遠方に出かける際は、会社からの急な呼び出しに備え、行き先や宿泊先を同僚に事前に伝えておいた。仲間の記者に内緒で旅行に行くことはまずできなかった。

地球の裏側にいても、携帯電話からメールで原稿や写真を送れる時代だ。記者としても、私的な時間を大切にしたいが、なかなか仕事との境界線は明確に引けない気がする。（山）